昭和34年の大村女子ダービー・上位入賞者たち

女子選手も60周年

――そして人気爆発！　この10年

一、女子最古参は登番78号

ボートレースでは、その開始前から男女の別なく選手募集が行われた。創設当初から、全国モーターボート競走会連合会・笹川良一会長の、「これからの時代は女子も男子と同じステージで活躍すべきだ」という方針があったと言われている。さらに戦後の"男女同権"ブームにも乗って、女性の志望者も少なくなく、選手登録番号の二桁台から女性の名前が見られる。ちなみに最古参は78番の則次千恵子（岡山）だった。

昭和27年4月の大村における初開催から2年弱、29年3月には芦屋で初のオール女子戦が開催された記録が残っている。当時からひとつの開催を行えるだけの、女子選手の数が揃っていたことがわかる。当時も女子戦の人気は高く、芦屋に続いて各地のレース場で開催された。

男性に混じって奮戦した女傑も多く、昭和30年度には下関1周年で戸板君子、福岡2周年で田川照子、32年度には住之江1周年で杉本明子が優勝した記録が残っている。

昭和58年、23年ぶりに開催されたオール女子戦

二、一時は4名にまで減った女子選手

しかし30年代後半から、結婚して引退する選手が多く、女子選手の数は徐々に減ってきた。実は他の公営競技（競輪・オート・地方競馬）でも、創設当初は女子選手がいたが、この頃にほとんど姿を消した。ボートでもその灯が消えかかったが、数名の選手が男子に混じって現役を続けた。

20年代から平成にかけて、39年間の選手生活を送った古川美千代さん（登番522「ボートレースマイスター」にも認定）はこう回顧する。

「昭和28年4月に選手登録した頃は、女子選手が40名ほどいたと思います。それが35年頃から減って、40年代から50年代にかけて最後に残ったのは、南田壽恵（449）さんに私、それに後輩の大森千恵（2426）、田中香代子（2465）の4人だけ。でももし自分ひとりになっても走り続けるつもりでした」。

その状況を打破したのが、昭和55年に9年ぶりの女子選手としてデビューした田中弓子（後に「鈴木」姓・2945　ボートレース殿堂選手に認定）だった。彼女は本栖研修所で養成を受けていた時からマスコミに注目され、デビュー後も活躍。それに続く女子の選手志望者が次々と現れてきた。同じ愛知支部の鵜飼菜穂子（2983・56年3月登録）もこの鈴木に憧れて艇界に飛び込んだひとりであり、以後はほとんど毎期、女子選手を採用するようになった。

そして58年8月、住之江で23年ぶりのオール女子戦が復活開催。その宣伝効果たるや絶大だった。

創成期から平成まで39年走った古川美千代さん

ヴィジュアル面での大きな貢献

昭和の晩年頃に人気を集めた倉田ひろみ

平成初めの頃の群馬の女子レーサーたち

昭和34年大村女子ダービーでは市内をパレード

平成21年7月の津MB大賞ポスターモデルは加藤綾

片山（現姓佐藤）幸子は強烈なセンター戦で活躍

女子選手が、ボートレースのヴィジュアル的なアピールに果たしてきた貢献度は小さくない。創設当初からオール女子戦は華やかで人気があり、開催時にはレース場の近隣地でパレードなども行われた。

平成以降、再び女子選手が増えると、来場促進のグッズ（テレカやオレカなど）やポスターなどに、盛んに採用されてきた。当時、こうしたグッズのモデルとして数多く登場した選手をあげるなら、木村厚子さん・山川美由紀・海野ゆかりの3選手だろうか。

また、女子戦の開会式が華やかなことはファンにも知られているが、最近は各地のイベントにも女子選手は引っ張りだこだ。トークショーなどでの集客力の高さはみなさんもご存知のことだろう。

女子王座3連覇を達成した"インの鬼姫"鵜飼菜穂子

三、鵜飼・日高・山川らが大レースへ

62年12月に第1回「女子王座決定戦」を開催。鈴木弓子はこの1戦での優勝を花道に、翌々年（平成元年）2月に引退。その後は、鵜飼・小神野紀代子・片山（現姓佐藤）幸子・日高逸子らが引き継いだ。彼女たちは今も現役であり、名人戦にも出場するなど長らく活躍を続け、女子戦を支えてきたのは衆知の通りだ。

中でも鵜飼は"インの鬼姫"と呼ばれて頂点に君臨。リーグ戦を勝ちまくって最多優勝で優秀選手表彰を受けたり、女子王座を3連覇（第5回は完全V）するなど、平成初期の無敵ぶりは群を抜いていた。

それに続いて、若山美穂子（現在は美穂）・佐藤正子・谷川里江・山川美由紀らが台頭。谷川は父・宏之譲りの整備力と勝負強さで女子王座を連覇、山川のスピードも出色だった。そして鵜飼・日高・山川らは、地元周年や地区選などのGIや、笹川賞をはじめとするSGへの出走機会も増えた。

さらに高橋淳美・柳澤千春・垣内清美・藤家妙子・花澤葉子・大島聖子・角ひとみらもA級上位に進出。高橋は女子戦よりも混合戦で強く、大島のスタートの切れは山川と双璧で、毎期高勝率を残した。

また結婚してもやめない選手が増え、日高・大島らは出産を経てさらに強さを増した。その点でも後輩選手に与える影響は大きかったといえる。こうして女子選手の層も厚くなり、リーグ戦は年間に20戦以上行われて人気も定着した。

平成デビュー組で最初に頭角を現したのは寺田千恵で、新田芳美・池（現姓道上）千夏・淺田千亜希ら四国勢が力をつけ、岩崎芳美・海野ゆかりの71期コンビ、西村めぐみらが続いた。

名人戦でも優出するなど円熟味を増した日高逸子